

## イエスのことば 第37回

イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。外から入って、人を汚すことのできるものは何もありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」

(マルコ 7 : 14~15 )

## □イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

## □文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. 異邦人地域への旅行第 1 回：ガリラヤ地方を離れて、ガリラヤ湖の北東地域の町ベツサイダの近くへ。「五千人の給食」と呼ばれる奇跡を通しての訓練
4. 「五千人の給食」の奇跡の直後、嵐の中での訓練
  - (1) 給食を受けた群衆（ガリラヤ地方のユダヤ人たち）がイエスを王に擁立しようとするが、イエスはその動きを拒み、弟子たちだけを舟に乗せて出発させた（日没直前）。
  - (2) 弟子たちの舟は、日没後から夜明け前まで、湖上で嵐に見舞われる。イエスは湖上を歩いて舟に乗る。弟子たちはイエスの神性を認めた。
5. 舟は、ガリラヤ湖の北西岸、ユダヤ人の地域に到着。そして宣教拠点のカペナウムに戻ってきたときに、給食を受けた群衆が追いかけてきたので、「いのちのパン」の教え。
6. 今回は、引き続き、カペナウムでの出来事。このあと、異邦人地域への旅行第 2 回（ツロ→シドン）に出かけることになるが、それは次回に。
7. 今回の内容を理解するための前提知識
  - (1) 指導者層は、イエスをメシアではないと公式拒否した後は、イエスの活動を監視するために、監視団を派遣した。監視団は、イエスがミシュナ（言い伝え）に違

反していると非難した。

- (2) ミシュナ（言い伝え）とは、当時のユダヤ教が作り出した膨大な規則である。特に「汚れの洗いきよめ」を重視し、食事の前には手を洗う、市場から帰ってきたら体をきよめる、食器や寝台を洗いきよめる、など、その規則は人々の日々の生活全般に及ぶものであった。
- (3) この「汚れの洗いきよめ」の規則は、モーセの律法には、ない。モーセの律法には食物規定があって、ユダヤ人が食べてはならない「汚れたもの」が定められていた。ユダヤ教の教師たちは、その汚れたものが、ごくわずかでも手や食器に付着していて、それが口の中に入るなら、モーセの律法に破ったことになる、と考えて、論理的に考えられる、あらゆるリスクを排除しようとしたのである。
- (4) ミシュナ（言い伝え）は、本来、モーセの律法を完全に守るためにどうしたらよいか、というところから出発したわけであるが、律法に示された神のみこころから離れて、外見だけ、形式だけに向きがちであった。さらに、ときとして、こうすれば律法を破ったことにはならない、という抜け道を産みだすことにもなった。
- (5) イエスは、聖書に書かれた定め、モーセの律法を完全に守ったが、ミシュナには従わなかった。弟子たちもイエスにならって、ミシュナの定める洗いきよめをせずに、パンを食べていた。それを見た監視団がイエスを非難したというのが、今回の出来事の発端である。

### 汚れについての教え

□監視団が来た（マルコ7：1～4）

さて、パリサイ人たちと、エルサレムから来た何人かの律法学者たちが、イエスのもとに集まった。

彼らは、イエスの弟子のうちのある者たちが、汚れた手で、すなわち、洗っていない手でパンを食べているのを見た。

パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わずに食事をするとはなく、

市場から戻ったときは、からだをきよめてからでないと食べることをしなかった。ほかにも、杯、水差し、銅器や寝台をきよめることなど、受け継いで堅く守っていることが、たくさんあったのである。

□監視団がイエスを非難した（マルコ7：5）

パリサイ人たちと律法学者たちはイエスに尋ねた。

「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。」

□イエスの答え：言い伝えは人間の命令でしかない（マルコ7：6～8）

イエスは彼らに言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを礼拝しても、むなし。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているのです。」

□イエスの答え：指導者たちは、神の戒めをないがしろにしている（マルコ7：9～13）

またイエスは言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを保つために、見事に神の戒めをないがしろにしています。モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は、必ず殺されなければならない』と言いました。

それなのに、あなたがたは、『もし人が、父または母に向かって、私からあなたに差し上げるはずの物は、コルバン（すなわち、ささげ物）です、と言うなら——』と言って、その人が、父または母のために、何もしないようにさせています。

このようにしてあなたがたは、自分たちに伝えられた言い伝えによって、神のことばを無にしています。そして、これと同じようなことを、たくさん行っているのです。」

□イエスは群衆を呼び寄せて、たとえ話を語った（マルコ7：14～15）

イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。外から入って、人を汚すことのできるものは何もあります。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」

□イエスは家に入ると、弟子たちにたとえ話を解説した（マルコ7：17～19）

イエスが群衆を離れて家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。イエスは彼らに言われた。「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」  
こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。

（補足：イエスの十字架によってモーセの律法は完成され、終了した。これにより、律法の中の食物規定も終了した。神がすべての食物をきよいとされたことを、あらためて明らかにしたのが、使徒10：10～16である）

□人を汚すのは、人の内側にある罪の性質である（マルコ7：20～23）

イエスはまた言われた。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、食欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

■罪の性質は、どうなるか・・・キリストとともに十字架につけられて、無力化された

私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだ<sup>1</sup>が滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。（ロマ6：6）